

ジョルジュ・ドゥヴルーと民族精神医学

— A・デプレシヤン監督作品

「ジミーとジョルジュ」に寄せて⁽¹⁾

松葉 祥一

ドボーからドゥヴルーへ

一九八四年のある日、ニューヨークのカフェにいるジョルジュに、一本の電話がかかってくる。「インデイアンの患者を診てもらえないだろうか」。本作品で描かれるこのシーンから民族精神医学が始まった。民族精神医学 (ethnopsychiatry) とは、人間の心とその民族的・文化的背景との関係を明らかにする研究であり、この研究に基づいた臨床活動を指す。ジョルジュは、このジミーとの経験から出発して民族精神医学を確立したのである。

では、ジョルジュ・ドゥヴルーとはどのような人物だったのだろうか、また民族精神医学とはどのようなものだろうか。

ジョルジュ・ドゥヴルーは、一九〇八年、ハンガリー（現ルーマニア）領ルゴジュの比較的裕福なユダヤ人家庭に、ジョルジュ・ドボー (György Dobó) として生まれた。一八歳のときにパリ大学ソルボンヌ校に入学。当初マリー・キュリーのもとで物理学を志したが、挫折。その後、書店員見習いや、ドイツ語による詩作の時期などを経て、マレー語の学習をきっかけに一九三一年民族学部に入部。マルセル・モース（一八七二—一九五〇年、フランスの社会学者・民族学者）の指導を受け、民族学にのめり込んでいった。一九三二年にはカトリックに改宗、一九三三年には正式にジョルジュ・ドゥヴルー (Georges Devereux) に改名している（ルディネスコ〔後出〕は、名前の由来を、エドワード・ブルワー＝リットン男爵の小説『ドゥヴルー』（一八二九年）だと推測している）。

ジョルジュは、モースの勧めもあって、一九三三年にロックフェラー財団の資金でアジアの調査に向かうことになった。その研修のためにアメリカ先住民の調査を命じられ、一九三三年から翌年までモハヴェ族のもとで現地調査を行った。後年ジョルジュは、この経験を「人生でいちばんすばらしい経験だった」と述べている。続けて、ベトナムの少数民族セダン族のもとで

現地調査を行った。その後ジョルジュは、ナチス政権の誕生によってヨーロッパに戻る機会を失い、一九五三年末、カリフォルニア大学バークレー校で、アルフレッド・クローバー (Alfred Kroeber、一八七六一一九六〇年、合衆国の人類学者。アメリカ先住民研究で知られ、精神分析にも通じていた) の指導で博士論文の準備に入った。マーガレット・ミード (Margaret Mead、一九〇一—一九七八年、合衆国の文化人類学者) にも指導を受けた。

指導教員から与えられた研究テーマが「モハヴェ族の性生活」であったことから、ジョルジュは、急速に精神分析に接近していった。精神分析の方法を民族学に応用したゲザ・ローハイム (一八九一—一九五三年、ハンガリー出身の民族学者・精神分析学者) に出会ったのもこの時期である。シカゴ、ウースター、ニューヨーク等で大学の非常勤講師をつとめる一方、病院の研究員等として臨床経験を重ね、それによって人類学と精神分析を結びつけた独自の理論と方法を作り出していった。一九四七年一月にトピカに移る直前には、教育分析を受けるために、パリ大学都市のアメリカ館に住んでいた。映画の中でジョルジュがフランス精神分析学会から不適任の烙印を押されるのは、教育分析の途中だったからである。

トピカという場所

本作品の舞台となるカンザス州トピカのメンンガー財団は、メンンガー家が創設したクリニック、サナトリウム、精神医学校からなる施設である。当事、カール・メンンガー (Karl Menninger、一八九三—一九九〇年、アメリカの精神医学者、精神分析家) と弟ウィリアムを中心に、アメリカの精神分析の研究と臨床実践の中心地になっていた。とくに、一九四六年に設立されたメンンガー医学校は、戦争経験者の治療にあたる精神科医の養成という国の要請によって、国内随一の精神科医養成施設へと急速に成長していた (『甘えの構造』で知られる土居健郎も留学したことがある)。

メンンガー自身が精神分析家であったこと、文化的背景を考慮に入れた治療が必要な患者が多かったこと、友人がいたことなどから、ジョルジュは、以前からこの財団で職を得ることを希望していたようだ。しかし、当事、合衆国では自我心理学が主流であり、文化的背景を考慮に入れた精神医学は始まったばかりだった。また、精神分析を行うことができるのは精神科医だけだった。したがって本作品でも、ジョルジュは「人類学者」として紹介され、以後の治療も精神科医の管理下で行うことが求められたのだ。

その後ジョルジュは、医師中心の運営方針に反発して、一九五二年にはデヴォンに青少年向けの医療施設「ドゥヴルー研究所」を開設、一九五六年にはテンプル大学医学部民族精神医学研究科助教となる。このころには、すでに民族精神医学のパイオニアとして有名になっていた。

一九六三年には、ニューヨークで知り合っていたレヴィー・ストロース (Claude Lévi-Strauss)、一九〇八―二〇〇九年、フランスの社会人類学者、民族学者) の招きで、パリの社会科学高等研究院で民族精神医学部門の教授に就任、一九八五年五月に亡くなるまで、ギリシア神話研究等を行うと同時に、後進を育てた。主要な著作として、すでにあげた著作以外に『行動科学における不安から方法まで』(一九六七年)、『相補主義民族精神分析』(一九七二年)、『女性と神話』(一九八二年) (邦訳: 加藤康子訳、新評論、一九九四年)、『ギリシアの悲劇と死』(一九八三年) などがある。

生涯六度の結婚

デプレシャン監督は、本作品の原作『夢の分析』のフランス語版 (ジョルジュ自身の校正による) に序文を寄せたエリザベト・ルディネスコ (Elisabeth Roudinesco、一九四四年―、フランスの精神分析家、歴史家) に取材するなどして、ジョルジュ

の伝記的事実を本作品に巧みに取り入れている。例えば、ジョルジュは一六歳の時、右手の手術の失敗によって断念するまで、ピアノストになることを夢見ていた。また、自らのアイデンティティについてはつねに複雑な思いを抱えていたようだ。あるインタビューでは、改名してフランス名にしたのは、子ども時代によい思い出がなかったからだと述べている。「子どもの頃はいつも、できるだけ遠く、遠く、遠くに行きたいと思っていた。その後、一九四一年に合衆国に帰化したので、本作品の時点では米国籍を有していたはずだが、フランス人だと思わせている。後年フランスでも、「自分自身の出自を偽ってハンガリー人だと思わせていました」と弟子のトビ・ナタン (後出) が証言している。

また監督は、ジミーとジョルジュのいくつかの共通点を暗示しているように思える。例えば、死に対する恐怖。ジョルジュは、十三歳の時に、同室で暮らしていた兄を拳銃自殺で亡くしている (デプレシャンの『二十歳の死』(一九九一年) を思い出させる)。後年、死と自殺は、ジョルジュの主要な研究テーマの一つになった。さらに、ジョルジュもまた戦争による精神的外傷を抱えていた。ジョルジュは一九四三年から翌年にかけて、インドシナの言語や風習についての知識を軍に提供するために中国に派遣されることになったが、その旅行中、次々と病気にかかって各地で入退院を繰り返し、きわめて衰弱して

一時は死を覚悟したことがあったという。

そして、母への反発。例えばジョルジュが十八歳の時にパリに留学することを決めたのは、ドイツ好きだった母親への反発からだったという。以後、手紙魔だったにもかかわらず、母親宛には三十年以上一通も書かなかつたらしい。またそれが一つの原因だと推測されるが、女性に対する強い執着と嫌悪があった。ジョルジュは、生涯六回にわたって結婚と離婚を繰り返している。

ジョルジュの評伝を書いたジョルジュ・ブロック (Bodt 2012) が言うように、ジョルジュの優れた業績の陰に、大きな「心の闇」(p.126) があったことは間違いないだろう。つねに不安に満ち、驚くほど短期間に居住地を変え、その手紙は不安の言葉であふれていたという。

民族精神医学とは

こうして、ジョルジュは、ジミーとの治療経験をもとに、本作品の原作である『夢の分析——ある平原インディアンの中の精神治療記録』(英語版一九五一年、仏語版一九九八年)を発表し、それを基盤にして、民族精神医学の基本的な考え方や技法をまとめた『一般民族精神医学試論』(一九七〇年)などによって、民族精神医学を確立したのである。

では、民族精神医学とはどのようなものか。ジョルジュの定義から見ておこう。「それは、必然的に、民族精神分析だと考えられる。多くの学問領域インクワイアリの協同による学問というよりも多くマルチの学問領域をもつ学問である。」(トビ・ナタンの著作への序文)

このような精神分析と人類学の関係を、ジョルジュは、「相補主義 (complementarism)」だと説明している。それは、簡単に言えば、精神分析と人類学が補い合うことを認める立場である。彼によればこの立場は次の三つの命題に集約される(『女性と神話』の邦訳に付された解説を参照、ドゥヴルー一九八二年、四五八―四七四頁)。

1. 精神分析(心理学)と人類学(社会学)は、どちらか一方に他方を還元してしまふことはできない。
2. 同じ現象に関する精神分析の説明と人類学の説明は、互いに補い合うことができる。
3. 精神分析的な説明と人類学の説明を同時に支持することはできない。

したがって、しばしば批判されるように、民族精神医学は折衷的な方法ではなく、つねに(普遍的に)両者を基盤に分析しなければならないというのがジョルジュの立場なのである。

要するに、ジョルジュの方法は、人類学的知見に基づく精神分析の方法だと考えることができる。したがって民族精神医学にはフロイトからローハイムを経てジョルジュに引き継がれた、

精神分析の技法が取り入れられている。ここでは、分析をする側とされる側の関係が重要な意味をもつ。例えば、ジョルジュが、ジミーの反発を見て回復を確信するのは、メニンガーが「患者が良くなるのは、医者を喜ばせようとするか、医者を困らせようとするか、どちらかのためだ」と言うように、治療的な関係の中で、心の病いが癒されるからである。

だからこそ、本作品のように精神分析医が患者と友情を結ぶことなどありえないと思われる方もいらつしやるだろう。確かに精神分析では、分析家が被分析者に対して感情的なつながりをもつことは強く戒められている。しかし、ナタンによれば、ジョルジュにとってジミーとの関係は、終生特別のものだった。ジョルジュは、『夢の分析』の一九六八年版序文で、ジミーとの関係を次のように述べている。

「私はジミー・ピカールを援助したわけではない。それは、彼がインディアン（のように強い存在）だったからではなく、私の力が及ぶ範囲内に彼がいてくれたからである。彼を分析することによって、私がたくさんの収穫を蓄えることができたのは、彼を援助したことによって、ひどい立場に置かれたインディアンに対するありもしない私の罪責感が減ったからではなく、ジミー・ピカールが、彼にはふさわしくない問題を抱えた立派な人間だったからである。彼は受けたもの

と同じだけのものを与えてくれた。

こうしたことは、私とジミーの間の個人的な水準で起こったことであり、二人の人間のあいだに起こったことであったことだけにかかわることである。二人の人間が共通の人間性によって、共通の誠実さの共通の意味を、共に探求したのである。その要石になったのは、各々の個性である。」

(Devereux 1951, p. 49)

多文化間精神医学

民族精神医学には、前史がある。古くから心の病の地域的特性はよく知られていた。代表的なものとして、ラタやアモックが知られている。アモックとは、マレー地域で見られる特異な心の病であり、男性に多く、激しい悲しみや侮辱を受けたことをきっかけに引きこもり、物思いにふけたような状態となる。その後突然に武器を手にして外へ飛出し、無差別殺傷を起こし、本人も自殺を企てる。しかし正常に戻ると、殺傷していたときの記憶は失っているという。このように特定の文化において発生する心の病や、またそれに対する特定の対処方法（お祓いなど）があることは、古くから知られていた。

そうした特定の心の病の学問的解明を試みたのは、クレペリン (Emil Kraepelin)、一八五六一一九二六年、ドイツの精神科

「医」が、早発性痴呆（統合失調症）や躁鬱病（双極性障害）が、他の地域でも見られる普遍的な現象なのかどうかどうかを調べるために、ジャワに旅行したことだとされる。そして、ジョルジュらの努力によって、一九七〇年代初めの合衆国やカナダにおいて、「多文化間精神医学」と呼ばれる領域にまで発展した。

その要因として、次の三点をあげることができる。第一に北米では、第一次世界大戦後、数年間のあいだに大量の移民受け入れがあり、その移住者たちが一定期間後に心の病いを訴えるようになったことである。第二に、リントン、ベネディクト、ミードらの文化人類学者が一定の成果を収めていたことである。第三に、ヨーロッパ知識人たちが、戦時中に亡命してきたことによって、北米の精神分析が活性化されたことである。

現在、多文化間精神医学の研究や臨床活動の内容として、次の三点がある。

①文化が異なると心の病の病態や有病率、治療方法、回復経過などがどのように異なるかについての、疫学的な比較研究や民族誌的研究。またそうした心の病に対応する、地域に固有の宗教的・文化的現象、例えば憑依現象やシャーマニズムなどの研究。

②文化と文化の接触によるあつれきや、異なる文化にどのように適応すればよいかについての研究。とくに移民や難民、避難民、外国人労働者、留学生、国際結婚カップル、帰国

子女、旧植民地国出身者などの心の病を理解し、彼らに関わるための技術上の提案、つまり移住者のための精神医学。③精神医学の理論と実践を、文化的に作られたものとして批判的にみていく研究。例えば西洋医学もまた文化的背景をもった理論・実践であるという視点をもつこと。

①は一九九四年アメリカ精神医学会の診断マニュアル DSM-Ⅳ（精神障害の診断と統計マニュアル）の「付録Ⅰ・文化に結びついた症候群の文化的定式化と用語集の概説」に収録されたことになって、「文化依存症候群」として広く認められるようになった。これは、ある特定の地域やエスニック・グループ、文化において発生しやすい精神疾患のことを指す。そこには、日本の対人恐怖症も含まれている。

ドウヴルー・センターの活動（トビ・ナタン）

他方、フランスでは、民族精神医学という名称が残り、北米とは別の発展をとげた。現在、彼の名前を冠したジョルジュ・ドウヴルー・センターが、パリ第八大学（サン・ドニ）内に設置されている。ジョルジュの弟子であるトビ・ナタン（Tobie Nathan、一九四八年―、エジプト出身の精神分析家、小説家）が一九九三年に創設したものである。筆者は、二〇〇四年の四月から九月まで、このセンターで研修を受ける機会があった。

神戸に多いベトナム人難民の調査と支援をきっかけにしてのこ
とだった（松葉二〇〇五年）。

同センターの目的は、移民の精神疾患の治療・研究・教育で
ある。専従数名の他は、大学等に所属し、三〇名の研究員が一
〇チームに分かれて活動している。一チームが日に二〜三組の
セッションを行う。主な対象は、移民労働者とその家族である
が、宗教セクト脱退者や拒食症患者、DV被害者等も受け入れ
ている。また雑誌の発行や学会の開催など、情報センターとし
ての役割も大きい。

治療方法の特徴は、ときには二〇人近くにもなる集団治療が
行われる場合があることであろう。患者をまじえて、精神科医
や心理学者、人類学者だけでなく、学校の教師、ソーシャルワ
ーカーなどが車座になる。私のような研修生も、自己紹介してそ
の輪に加わる。受け入れ国の文化と患者の文化のあつれきが問
題になる以上、多様な視点を提供することによってこの関係を
相対化するのが目的である。多職種間連携の効果もある。もう
一つの特徴は、患者の文化による儀礼が治療に取り入れられる
ことである。ただ、こうした方法には精神分析の側からの批判
も多く、トビ・ナタン自身も試行錯誤を重ねている（ナタン、
一九八六年）。

フランスの民族精神医学は、ジョルジュを介して北米の多文
化間精神医学から影響を受けている。しかし、ナタンは、両者

の間には差異があるという。第一に、フランスではラカン派に
代表される精神分析の独自の発展があったこと。第二に、レヴィ
|| ストロースに代表される構造主義人類学の発展があり、その
せいでエディプス・コンプレックスや近親相姦の禁止等を重視
する傾向が生まれたこと。第三に、多文化間精神医学が実用志
向であるのに対して、民族精神医学は理論志向だったことであ
る。

日本の多文化間精神医学

民族精神医学や多文化間精神医学は、グローバル化によつて
人・物・情報等の交流が盛んになるとともに、その役割が認識
されるようになってきた。すなわち、その三つの役割である、
①比較精神医学の疫学的研究、②移民、難民の精神医療、③精
神科領域の批判的再検討のうち、第二の役割が重要視されるよ
うになっている。とくに移民の多い北米やヨーロッパにおいて
は、医療政策にも反映されるようになった。

日本でも文化的な視点をふまえた精神医療のあり方が提案さ
れてきた（中井久夫二〇〇一年）が、一九八〇年代以後、日本
人の海外進出が活発になり、海外で心の悩みをもつ人が増える
と同時に、日本の各地に、インドシナ難民、中国帰国者、外国
籍花嫁、移住労働者が増えはじめ、文化適応の問題に悩む人々

が増え、一九九三年には、「多文化間精神医学会」(<http://www.jisp.net/>)が発足した。とりわけ、ヘイトスピーチがはびこる社会の中では、他の文化的背景を持った人々が生きにくいことは想像に難くない。

本作品と民族精神医学

それにしてもデプレシヤンは、なぜこのテーマを選んだのだろうか。監督は、二五年以上前に原作を読んだときから、非常に興味をもち、いつか映画化したいと考えていたという。実際、『キングス&クイーン』(二〇〇四年)のイスマエル(マチュー・アルマリック)を診察する女性医師(エルザ・ウォリアストン)に、ドゥヴルーという名前が与えられ、診察のシーンに彼の精神医学のいくつかの要素が取り入れられていた。

その背景には、デプレシヤンの精神分析に対する興味と共に、民族や移民問題に対する彼の関心があるだろう。デプレシヤンは、移民問題に強い関心を抱いており、活動の中心に立ったこともある。一九九七年に、非正規滞在の移民に宿泊場所を提供することを禁じたドゥブレ法に反対して、市民的不服従を呼びかける「映画人六十六人声明」の運動を、パスカル・フェランとともに、中心になって担った。また二〇一三年十月に、フランス東部の町で、十五歳のロマ(かつてジプシーと呼ばれた集

団の一部)の少女が、校外での学校行事参加中に、スクールバスから降ろされて警察に身柄を拘束され、その日のうちにコソボに強制送還されるというレオナルダ事件が起こったときも、高校生たちの反対デモを支持し、オランダ大統領の決定を非難するインタビューを行った。

こうした視点が、デプレシヤン監督の作品の通奏低音になっているということもできるだろう。

註

- (1) 本稿は、アルノー・デプレシヤン監督作品「ジミーとジョルジュ——心の欠片を探して(原題 Jimmy P.: psychotherapy of a plains indians)」(フランス、二〇一三年)の日本公開(二〇一五年一月)にあたって、同作品の解説として書いたテキストである。同作品のパンフレットに収録された解説は、本稿を三分の一程度に縮減したものである。

文献表

- Bloch, Georges (2012): *Georges Devereux, sa vie, son œuvre, et ses concepts: La naissance de l'ethnopsychanalyse*, Editions Universitaires Européennes.
- Devereux, Georges (1951): *Reality and Dream: Psychotherapy of a Plains*

Indian, New York: International Univ. Press. French translation: *Psychopathologie d'un indien des plaines: réalités et rêve*, rééd. Fayard, 1998, 2013, préface d'Elisabeth Roudinesco.

ドゥヴル、ジョルジュ（一九八二年）／加藤康子訳（一九九四年）…
女性と神話、新評論。

松葉祥一（二〇〇五年）…民族精神医学とは何か——トビ・ナタンの理
論と実践、『神戸市看護大学紀要』、第九号、一一九頁。

ナタン、トビ（一九八六年）／松葉祥一・植本雅治・椎名亮輔・向井智
子訳（二〇〇五年）…他者の狂気——臨床民族精神医学試論、み
すず書房。

Nathan, Tobie (2013): Georges Devereux, père de l'ethnopsychiatrie avec
Tobie Nathan, l'émission du mardi 10 septembre 2013, France Inter.

中井久夫（二〇〇一年）、治療文化論、岩波現代文庫。

（まっば・しょういち／哲学）